

併合（および併合理論）の進化

藤田 耕司（京都大学）

人間言語に対する生物学的アプローチである生成文法・生物言語学の基本的な考え方やこれまでの経緯・現状・展望を紹介して、本ワークショップの話題の1つを提供する。

言語は意味と音声を階層的統語構造を介して繋ぐ能力であり、この意味での構造依存性を持つ能力は他の種には見つかっていない。生成文法はこういった言語の形式特性が人間固有の生得的能力である普遍文法（UG）に根ざしたものであると考え、その実体を解明することで人間の本性の根源的理解に迫ろうとする企てである。

これまで、言語の離散無限性・回帰性・内心構造性といった構造特性を生み出す能力を、生成文法は句構造規則・変形規則・Xバー理論・ α 移動など様々な理論装置を用いてモデル化してきたが、現在のミニマリスト・プログラムと呼ばれる研究戦略においては、これらは Merge（併合）と呼ばれるたった1つの、最もシンプルな演算操作ですべて説明できると考えられている。

この併合がどのようなものであり、どう働くのか、またその起源・進化と言語自体の起源・進化に関してどのようなシナリオが想定可能かについて、発表者自身の研究を交えながら分かり易く解説する。言語の根幹をなす「メカニズム」としての併合が、生物学・生物学哲学で一般に「メカニズム」として承認されるものとどの程度整合しているのか（or していないのか）を検討したい。